

研究ノート

アート・アーカイヴの諸相

二〇一四年二月二十五日(火曜)午後二時から五時まで、東京文化財研究所セミナー室においてミニ・シンポジウム「アート・アーカイヴの諸相」を開催した。近年、国内で開催される戦後日本美術を検証する展覧会においては、作品制作の所以を知らず、スケッチブック、書簡、記録写真、映像資料などさまざまなアーカイヴを用いた展示が行われ、また、パフォーマンスなどの行為自体を表現とする作家やグループにおいては、アーカイヴがその活動を検証する唯一の手掛かりとなる場合も少なくない。さらに、北米を中心とする戦後日本美術への関心の高まりにより、重要作家のアーカイヴが海外の機関に収蔵されることもしばしば耳にする。今回の企画は、国内においてもその重要さは認識されているなかで、文化財研究機関、美術館、アーカイヴ機関、その他の団体などが、戦後日本美術のアーカイヴに対して、どのような活動をし、これから展開できるだろうかという問題意識が企画の発端であった。

今回は、比較的近い時代の「アート・アーカイヴ」をテーマとし、第一部として、アーカイヴを活用し、またその構築に携わっている美術史家として加治屋健司氏(当時は広島市立大学芸術学部准教授、現在は京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授)、アーキヴィストとして上崎千氏(慶應義塾大学アート・センター所員)、ライブラリアンとして橘川(東京文化財研究所企画情報部アソシエイトフェロー)が個別発表を行った。それぞれの立場からアメリカや日本の個別のアーカイヴを紹介し、またそこから見えてくるアーカイヴにまつわる思考、方法論などについて、確認しつつ、第二部においては、アート・アーカイヴの現状を踏まえながら、その在り方、広がり、可能性について、ディスカッションを企画したものである。

加治屋氏には「美術アーカイヴのなかの美術史」というタイトルで、アメリカ美術史の研究者として利用してきたアメリカの美術アーカイヴ(スミソニアン協会の

アメリカ美術アーカイヴ、ニューヨーク近代美術館アーカイヴ、Getty研究所特別コレクション等)を紹介していただきつつ、アメリカの現代美術史研究におけるアーカイヴ資料の役割について考察していただくとともに、代表を務める日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴの活動を踏まえ、戦後日本美術研究において必要とされる美術アーカイヴについて、運営者と利用者の双方の視点からお示しいただいた。上崎氏には「アーカイヴと前衛——表現の非永続性(ephemerality)と資料体」というタイトルで、草月アートセンターなどを例に、前衛芸術のアーカイヴ的な在り方についてご発表いただいた。「エフェメラ」と呼ばれる資料群が、作品そのものではなく、作品に隣接して存在するアーカイヴであることについて、前衛芸術を扱うデータベースの設計・構築プロセスや、各種資料体の組織化に触れつつ、アーカイヴを形成する思考、あるいはアーカイヴに内在する思考としての「アーカイヴ的思考」についてご発表いただいた。

橘川は「画家中村宏氏作成ノートに残された記録と資料——東京芸術柱展、観光芸術研究所を中心に」というタイトルで、東京文化財研究所が所蔵している中村宏氏作成ノートを紹介した。これは、中村氏が一九六〇年代後半に使用したと思われる、前衛美術会の会務、活動を記録したノートで、そこに収録された同会の運営に関する資料や記録(会議議事録、展覧会出品規定、展示風景写真など)、観光芸術研究所に関する資料を追いながら、研究資源としての意義の一端を紹介したものであった。

この研究ノートは、シンポジウム第一部(個別発表)の内容を改めてそれぞれがまとめ、第二部(ディスカッション)の内容を再録したものである。

(橘川英規)